

埋蔵文化財発掘調査ニュースNo.8

ま か び ふる しま こ ぼ ぐん
真嘉比・古島古墓群



1999年3月

那覇市教育委員会

真嘉比・古島古墓群発掘調査ニュース

(1) はじめに

真嘉比・古島古墓群は那覇市字真嘉比および古島地内に所在します。

現在ここは那覇市による真嘉比古島(第二)土地区画整理事業が進められており、将来新たな街がつくられることとなります。

那覇市教育委員会では、平成5年度から地区内にあるこの真嘉比・古島古墓群の発掘調査を継続的に行っています。

(2) 遺跡の環境

真嘉比・古島古墓群は、真嘉比道(地元ではマカンミチと呼ぶ)を中心に、ほぼ東西に幾つかの墓群を成して広がっています。この真嘉比道は王府時代当時、首里の儀保(儀保交差点付近)から末吉・真嘉比・安里を經由、崇元寺下馬碑げばひの前に出る道で、いわば首里と那覇を結ぶ街道のひとつでした。真嘉比・古島古墓群はこの真嘉比道の中程に位置しています。あたりは現在も多くの墓がたち並び、戦前まで民家も殆どなく寂しい場所であったようで、沖縄芝居「逆立ち幽霊」の舞台となったことでも有名です。

この辺りは地質的にみると、シルト岩(方言でクチャ)と第三期微粒砂岩(方言でニービ)層により形成されています。この内砂岩層は糸満市・豊見城村西側から那覇市・西原町・中城村を縦断、沖縄市東方の泡瀬方面にかけて断続的

にのびており、市内では小緑から石嶺にかけて、そしてここ真嘉比で顕著にみられます。柔らかく加工しやすいので、墓をつくるに適した場所といえます。

(3) 遺構について

これまでに約50基の古墓を調査しました。これらは外観上の特徴から亀甲・破風・掘込墓の形式に分けられます。特徴的なものを紹介しましょう。

〈亀甲墓〉

全体を面取りした切石で精緻せいちに積み上げ、屋根にも同じく切石を葺きます。墓庭も同じく切石による石垣で囲みます(写真1)。なかには墓堂を目隠しするように庭の中央に障壁(沖縄ではヒンプンと呼ばれる)を設けたものもあります(写真4)。墓の外観は、本来漆喰で化粧仕上げを施した、沖縄独特の美しい墓です。

墓室内部も石組みで築かれています。蔵骨器を安置するひなだん雛壇状の柵(方言でタナ)やその手前には遺骸を洗骨するまでの間仮安置する平場(方言でシルヒラシドゥクル)などが設けられており、沖縄の墓の完成した姿をみることができます(写真2)。

〈破風墓〉

切妻屋根を持つ墓で、屋根やその周辺以外の特徴は亀甲墓に近似します(写真3)。その為でしょうか、本遺跡では、元々亀甲墓だったものを後に破風墓に造り直したものがありません(写真4)。

〈掘込墓〉

現在までに確認された墓の殆どは、掘込墓(方言でフィンチまたはフィンチャーと呼ぶ)です。基本的に先述のクチャもしくはニービを掘り込み、墓室をつくり出す比較的小規模でシンプルな形態を持つ墓ですが、外観についてやや細かくみると、墓口から墓室まで直接掘り込んでつくり出すものと、前面に石を積み上げて塞ぐものがあります(写真5・6)。掘込墓の場合、亀甲墓等のように石垣で囲った明確な庭は見られませんが、多くの場合、前方を切り土あるいは盛り土して平場を設け、庭を意識した空間をつくります。一方、墓室内にはタナを有するものと無いものがあります。

〈墓の変遷について〉

真嘉比・古島古墓群では多くの墓が所狭しと建ち並んでいます。発掘調査の結果、亀甲墓から破風墓へつくり直した例(写真4)や古い墓を埋めその上に新たに墓をつくる、いわば墓同士の新旧関係の判る例(写真7・8)が確認されています。これらは、墓域の成り立ちや墓の変遷を探る上で重要な事例といえます。

(5) 遺物について

出土した遺物の殆どは蔵骨器(厨子:方言では一般にジーシと呼ぶ)です。琉球石灰岩製のものや陶製のものがあって(写真8の2)、それぞれの形態にもバラエティーがみられます。これ

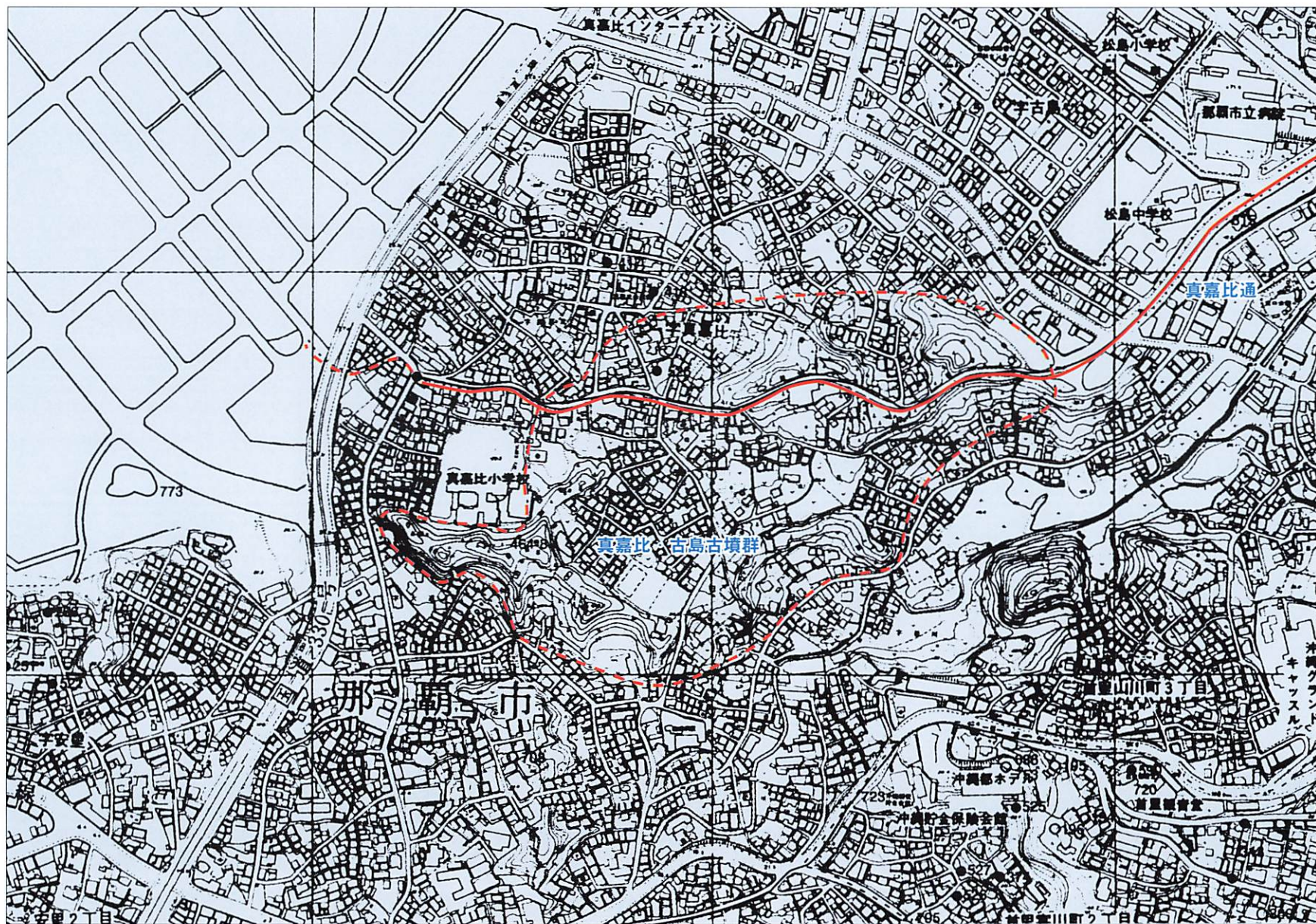
ら蔵骨器には、被葬者の名前や身分、亡くなった年月日や洗骨の年月日などを墨書することがあります(銘書:方言でミガチと呼ぶ)。墓や遺物の具体的な時期や個人の身元を特定するひとつの決め手になります。

その他の遺物としては、簪^{かんざし}、煙管^{ちよこ}、猪口、瓶、指輪、銭貨などがあり、いずれも被葬者へ副葬したものと考えられます(写真9)。

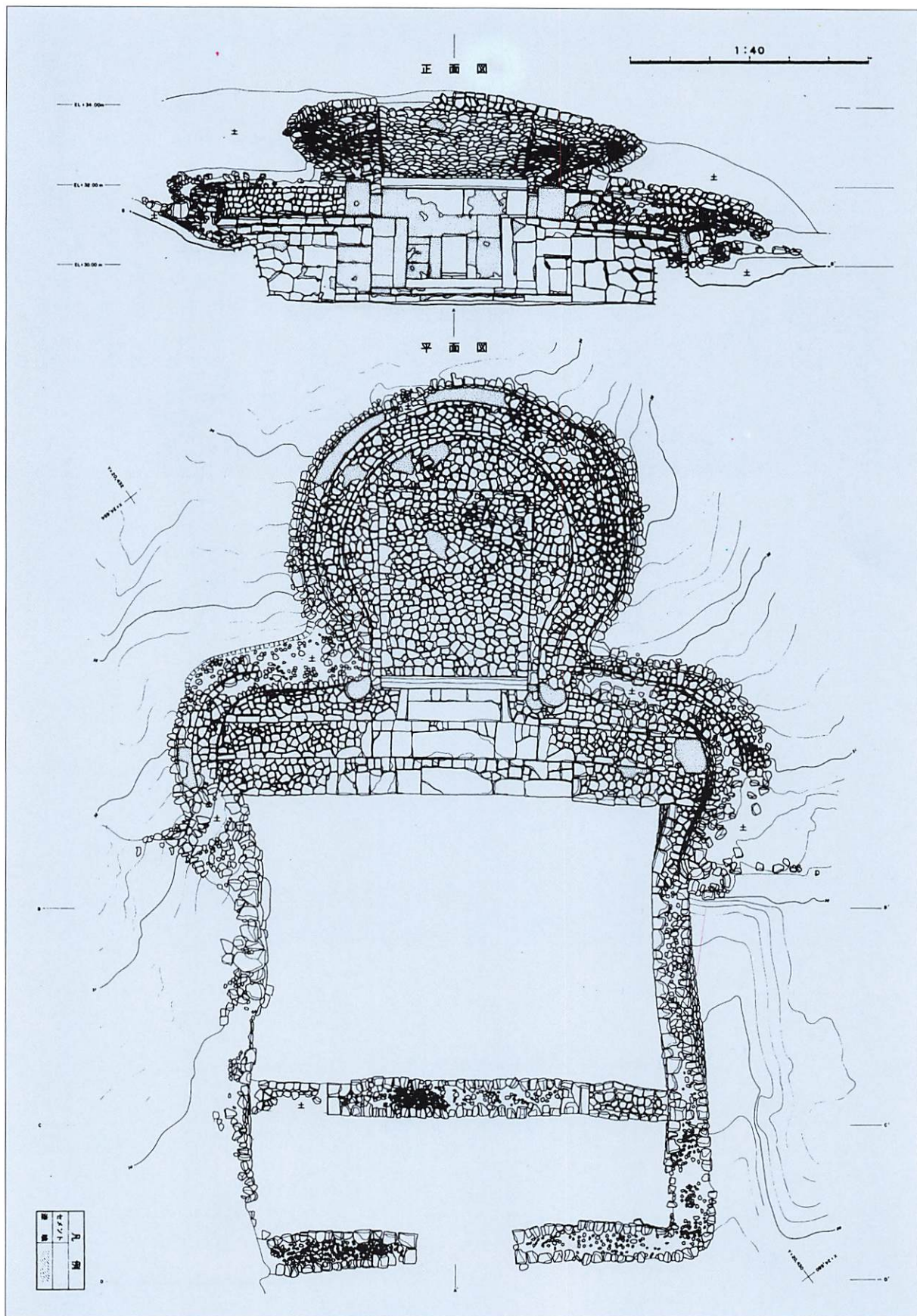
(6) 終わりに

以上、真嘉比・古島古墓群の概要について紹介しました。真嘉比・古島古墓群がいつからつくられるようになったかは明らかではありません。ただ、現在のところ蔵骨器にみる銘書きから、康熙^{こう}30(1691)年や乾隆^{けんりゅう}61(1796)年の年号が確認されており、他方、山川村(今の首里山川町)の文字が読みとれる資料もあります。このことから、少なくとも17~18世紀頃からこのあたりが墓地として成立、また首里の人々が利用したことが判ります。

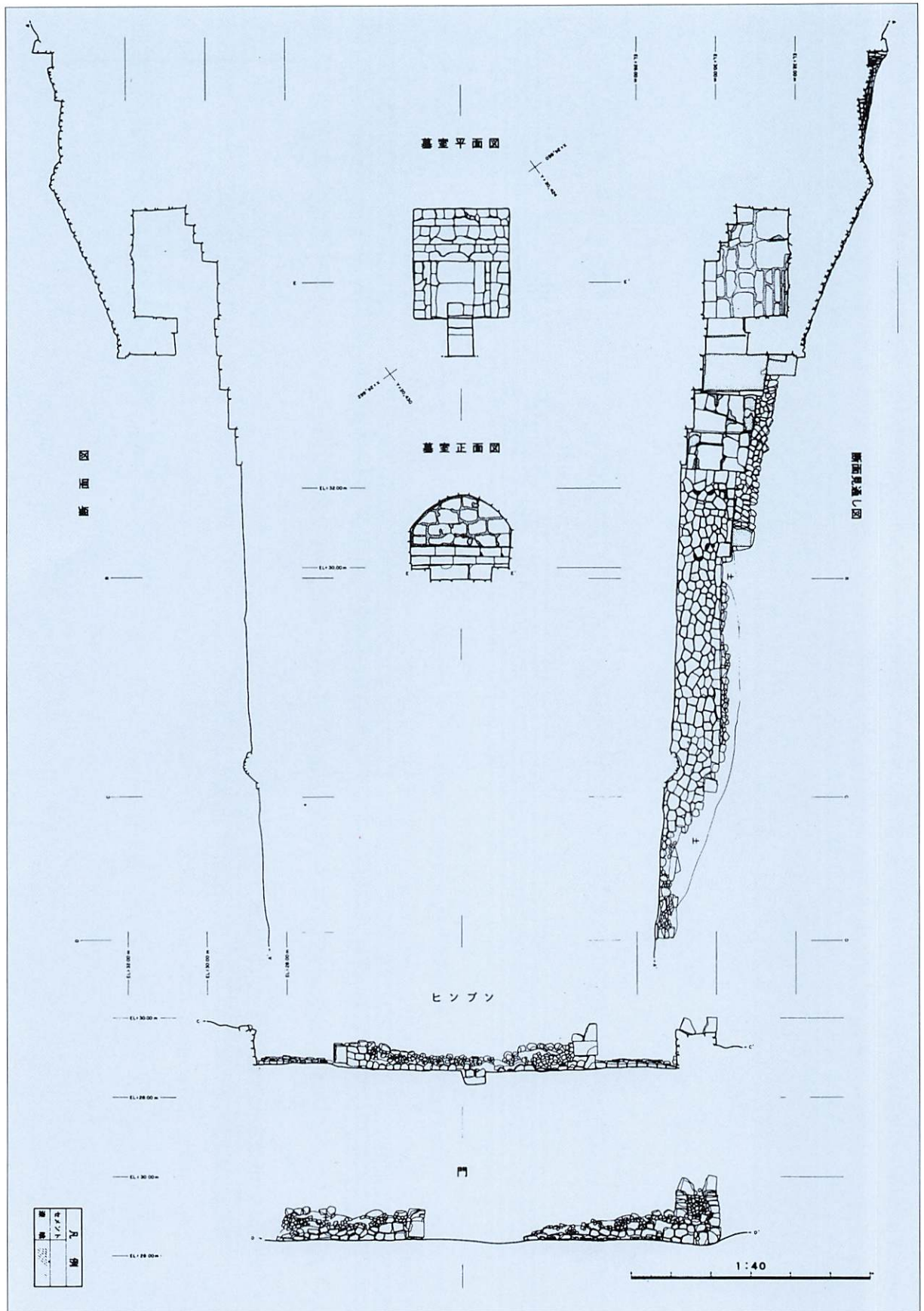
これらの資料は今後詳細な分析を行うことになっており、近世沖縄における葬墓制研究の貴重な資料になるものと期待されます。



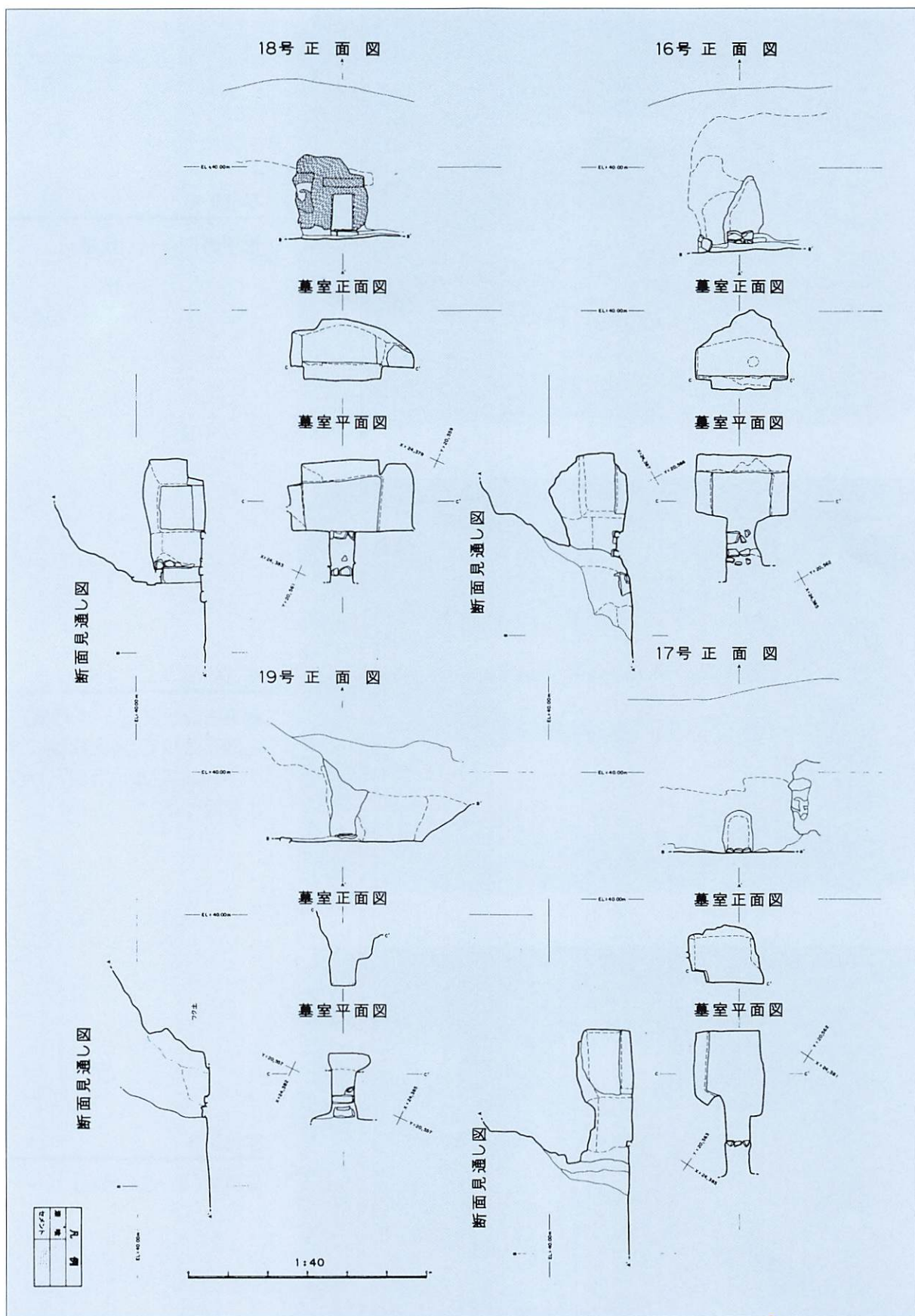
第1図 真嘉比・古島古墓群の位置 (赤の破線内。赤の実線はマカンミチ)



第2図 II-1号墓 実測図



第3図 II-1号墓 実測図



第4図 II-16 ~ 19号墓 実測図

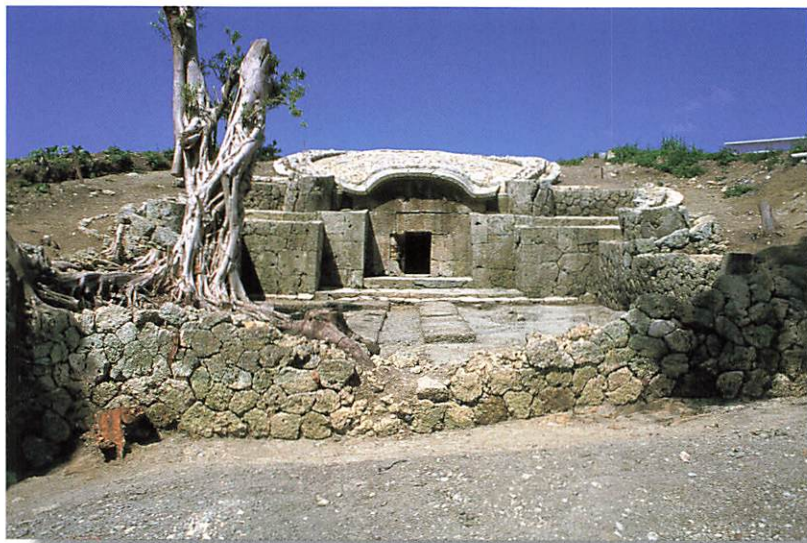


写真 1

亀甲墓(Ⅰ-10号墓)



写真 2

墓室内の状況(Ⅱ-1号墓)
全面石張りで、奥と両脇にタナ、手前はシルヒラシドゥクルを設ける。



写真 3

破風墓(Ⅱ-26号墓)

写真 4

亀甲墓から破風墓へつくり直された例(Ⅱ-1号墓)
庭の中央にはヒンプンが
設けられる。



写真 5

掘込墓(Ⅱ-11~15号墓)
墓口から小さく掘り進み、内
部を大きく掘って墓室をつ
くる。



写真 6

掘込墓(Ⅰ-6号墓)
横穴を大きくとり、前面に石
積み構築して墓室の空間
をつくる。





写真7の1

墓の新旧の判る例。上位墓(Ⅱ-37号墓)の発掘後の状況。この後、庭の床面を半載して掘り下げる。



写真7の2

上位墓(Ⅱ-37号墓)の床面から下位墓(Ⅱ-51号墓)が検出された。



写真7の3

この下位墓(Ⅱ-51号墓)は未開の状態、蔵骨器も安置されたままであった。

写真 8 の 1

これも墓の新旧の判る例。
上位墓(Ⅰ-7号墓)の庭の
掘り下げの様子。



写真 8 の 2

この結果、下位墓(Ⅰ-8号墓)
が検出された。墓室内には蔵
骨器が安置。石製と陶製の蔵
骨器が確認できる。

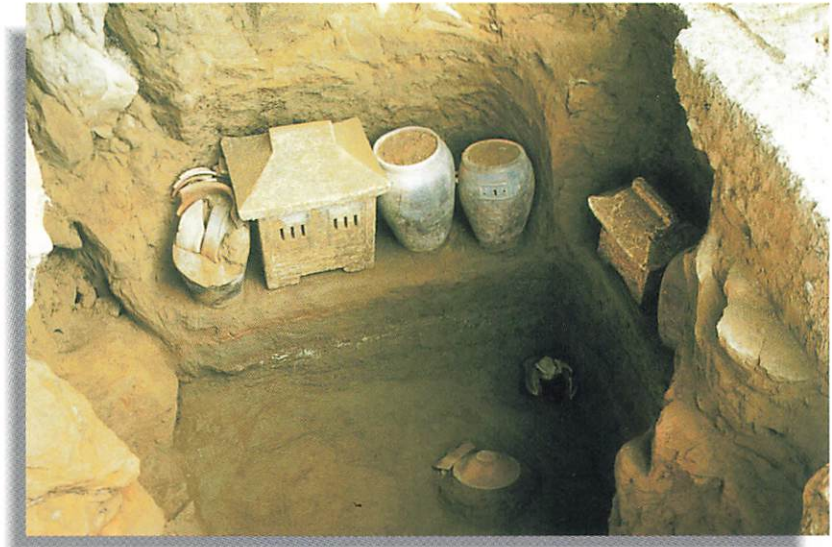


写真 9

墓庭床面の発掘の様子。
造成土下部で出土した遺物(Ⅰ
-10号墓)。





発行／那覇市教育委員会 〒900-0022 沖縄県那覇市樋川2-8-8
TEL (098) 853-5775

編集／那覇市教育委員会文化財課
印刷／有限会社 サン印刷